

北面の武士として、前途洋々たる若者であった西行。
二十三歳にして世を捨てた漂泊の歌人の心とは
激しくも、やるかたないその思いを、西行は歌に託します。

西行の出家について

西行は、圓位法師ともいい、もとは佐藤義清というあっぱれなもののふであったのですが、二十三歳で妻や子たちをおいて出家します。佐藤一族という東国で大変勢力のある武士の一族に生まれ、将来性のある有望な若者として北面の武士になりました。また、武士ではあるけれども和歌を詠んで貴族社会にも出入りができる西行は、生きる希望を豊かに持てるはずの若者であり、世間的な冥利を得ようとして生きれば何も不自由はなかったのです。その人が両親を捨て、妻を捨て、子を捨て、世俗的な冥利を捨てて、なぜ出家をしたのでしょうか。しかもその後、宗教家・僧侶としての階級を上げていったわけではなく、寺を持つでもなく、雨露をしのぐだけの庵を結んでは壊さすらいの歌詠みとして、生涯を遍歴の中で終えるのです。なぜそういう暮らしに入り、しかも熱烈としてその思いをしばませることなく歌を詠み続け、生涯輝いていられたのでしょうか。これは永遠の謎とも言えるでしょうし、活力を失っている現代の我々にとっては生き方の手本ともなることでしょう。

西行の出家以前の経歴は伝説の中でしか知ることができません。比較的早い段階から、西行にはいろいろな伝説がつきまっています。西行は人々に伝説として語られるような、心を惹きつける優れた魅力を持った人だったのです。生きているうちから死後までさまざまな伝説が語られ、延々として現在まで語り継がれている西行の魅力とはどのようなもののでしょうか。そしてその伝説が、千年近い年月を経ているのになぜ今なお我々の心を深々と打つのはなぜなのでしょう。

西行の出家の理由は世俗的には恋愛問題にある、友人の死にあるなどと、種々の説が流れています。ある説では高い身分の婦人に恋をしてその耐え難さに出家をしたと云われています。断片的な理由としてはそれらの推測が成り立つ記述などもあるのですが、西行を本当に考えていくには、その心、その魂を一番凝縮した、西行自身の遺した濃密で力強いもの、すなわち「歌」を重視しなければなりません。西行に関する一等資料は歌です。西行の足跡については分かっている事も分かっていないこともあるのですが、その歌が如実に語る部分を大事に考えたいと思います。

迷い苦しむ西行

西行が生きた時代は文学史的には新古今和歌集の時代です。新古今和歌集は、後鳥羽院という激しい情念を貫いた悲運の天皇の文学的な情熱が結集している勅撰和歌集です。勅撰和歌集というものは、近代ではあまり重要視されていませんが、日本文学のバックボーンを成しているのは勅撰和歌集だと言えます。日本文学の歴史の深い心を読みとるには勅撰和歌集を読むのは良い方法です。そこにはその時代の脈々とした気迫、息吹が籠もっているのです。

世をのがれて伊勢の方へまかりけるに鈴鹿山にて

鈴鹿山浮き世をよそにふりすていかに成り行く我が身なるらむ
(新古今和歌集巻17・雑中)

これは西行が出家をしてまもなくのまだ若い頃の歌です。鈴鹿の山を見て山に呼びかけています。出家をしたものの、西行の心が確固とした信念につらぬかれているというのではないのです。西行は絶え間なく迷っている。心の中で苦しみ迷っていた人なのです。この定めない、つらい人の世。それを振り切って自分は出家したのだ。うき世は「浮き」と「憂き」の掛詞で、「ふり」「なり」は鈴の縁語です。短歌は古くなるほど、一つの言葉に多様な意味を持たせています。近代の合理主義によって一つの言葉は一つの意味をしか持たないようになってしまいました。これは、古典の幅の広さ内容の深さ奥行きを非常に単純化し衰えさせてしまうことになりました。また、西行の時代は活字文化の普及していない時代で、伝説や歌は口から耳へ口から耳へと生き生きとした言葉と心が自由自在に結びついた形で伝わっていました。もちろん文字があることによって文学作品は後世に残っているわけですが、記号・符号となってしまった活字に頼る近代人の便利主義は言葉の力を弱めました。歌を読むときには、声を出して口から耳へ届き心に響かせる、本来の歌の読み方をしてください。

短歌では上の句は前哨・前奏曲であり、そこに叙景、事柄の次第を述べ、下の句でぐっと叙情が深まり、自分の思いを凝縮して濃密な形にします。この歌は「我が身はこれからはどのようになっただろう」と結んでいます。言葉が選びに選んで歌われています。結句の「我が身なるらむ」にしても、我が身なりけり、我が未なるらん、我が命なるらんなどいろいろな言葉が出てきたはずですが。そのなかで西行は「いかに成り行く我が身なるらむ」という言葉を選んだのです。「身」という言葉はたった一音ですけれども和歌の上で使うと深い働きをしてくれます。「身」は心と体、魂を含め、自分の行く末、運命をあらわしています。「どうなっていく、我が行く末なのだろう」ということです。出家して、なおその直後から西行は迷っている。苦しんでいる。悩んでいる。西行はそうして出家したのです。

推敲について現代人は技巧的にとらえ、美しく表現しようとするから言葉を選ぶのだと考えがちですが、そうではないのです。自分の心の真実とぴったりとする言葉を探しに探す。それが推敲をするということなのです。推敲という言葉は唐代の詩人賈島が、「僧は推す月下の門」の「推(おす)」を「敲(たたく)」にしようかと迷ったという故事からでているのですが、和歌の推敲のもとにあるのは心なのです。自分の心がその言葉にぴったりと表れているか、にじみ出しているのか、そのことを考え考えしながら、より深い、より真率な表現を手探りで探していくのが推敲です。西行が選んだ言葉にも、その心が如実に表されています。和歌は他の文章よりも濃密な言葉なので、心を込めて読み込み、その小さな単純な形式の中に込められている思いの深さを読みとって頂きたいと思います。

題詠による恋の歌

西行が心を注いで読んだものは、云うまでもなく花・桜であり、月であり恋でした。西行は出家してから後も非常に情熱を注いで恋の歌を詠みました。現代の人々は、西行は妻や子を離縁した後、自分勝手に恋愛していたのかと思われますが、これは違うのです。現実の生活の実体がなければ文学が生まれてこないというのは、近代以降の文学に対する考え方の貧しさです。

本来、歌会始などで最も大事なものは恋の歌でした。年の初めやある天皇の一代の記述の始め、物事のはじめにはまず恋が、最もエネルギーに心と体を燃焼させて理想の異性と合体する物語があるべきなのです。それは歴史的な記述とは違います。たとえば、「古事記」の神武天皇の項は天皇が乙女に求婚をする話で始まります。求婚をするにはまず歌を詠み、返事も歌で返します。日常会話とは次元の違う魂の呼びかけ、或いは神様とのやりとりなど大事な言葉は歌の形で交わされたのです。年の初め、物事の初めに、人々の心を感動させる恋歌を詠むことのできるエネルギー、活力を持っている、あるいは人を深く愛する心を持っているということが大事なのです。そしてそれが表現されるのが和歌です。ですから、出家してから後も西行は恋の歌を熱心に詠みましたし、あるいは天皇や皇后なども、非常に力を入れたのが恋の歌です。

勅撰和歌集では、平安から新古今和歌集の中世にもなると、恋の歌の題が非常に複雑になっていきます。逢ひみでの恋、別れて後の恋、あるいは、逢ひて逢はざる恋……などです。こういう歌題を出し、それに合わせて歌を詠むということは、内的な体験として恋を知っていながらも、それはリアルな体験の単純な表現ではないのです。もちろん、現実には火花の散るような恋を成就しようとする、そのときに交わし合う恋歌はすばらしい力を持っていますが、題詠の歌は、現実よりももっと深くもっとすばらしい理想の恋を表現します。そして、それはかくあるべきだと、複雑な題をつくってそれに沿った歌を詠んだのです。たとえば「忍ぶ恋」の題詠によって、百人一首にも採られた、「玉の緒よ絶えなば絶えねながらえば忍ぶることのよわりもぞする（式子内親王・新古今和歌集・恋一・1034）」などという深い感動的な歌が生まれました。

西行の恋の歌も挙げておきます。この中には題詠ばかりではなく、身につまされるような思いで詠んだ歌もあるかもしれません。長い人生体験の中で西行の心に深まってきた恋の思いの表現が詠われている歌だと思えます。

いまぞ知る思い出でよと契りしは忘れむとてのなさけなりけり

かかる身に生したてけむたらちねの親さへつらき恋もするかな

あはれあはれこの世はよしやさもあらばあれ来む世もかくや苦しかるべき

花に惹かれる心

西行の花の歌の代表的なものは吉野で詠まれています。「吉野山」と呼びかけた歌がいくつもありますが、これは、単に歌枕の名称を挙げただけではなく、山に対する万感の思いを込めた呼びかけです。中でも次の歌は、西行の花に対する心がよく表れています。

吉野山こずえの花を見し日より心は身にもそわずなりにき
(山家集・新古今和歌集)

絶唱だと思います。吉野山の梢に咲く桜を見てから、自分の心が身にそわなくなってしまった。肉体から魂が浮かれ出てしまって、桜の周りに漂うようになってしまった、というのでしょうか。「身」がここにも出てきます。西行は「身」という言葉が好きなのですね。西行がこのことばを使うと 言葉に力があり、普通の何倍も重くなります。西行が「命」「身」などの言葉を使うとき、とてもかなわないと感じます。

この歌に現れたものを見ても、単純な失恋や思いが届かないなどというようなことで出家したのではないと思うのです。西行という人はこれでよく体が壊れなかったと思うほど、心がちりぢりになるほど“もの”に心を惹かれる人なのです。非常に心の激しい人ですが、同時にひたすら他者の魂(人だけではなく、木や草や峠や庵、或いは虫や鳥)に心を千々に惹かれる、そして自分の心が身も保たないほどに乱れに乱れいたみにいたむ。そういう人なのです。

西行が生きた時代

西行が生きた時代を考えると、こういう感受性の強烈な人が普通の生き方をするのは耐え難かったのだらうと思います。西行が伊勢に来たのは西行の老境、平家が滅びに瀕し、都落ちをしていくころです。頼朝が伊豆に兵を挙げ、その少し前には源家の先駆けとして平家の追討に打って出た源頼政、この人は心深い歌を詠んだ歌人でもあるのですが、宇治の平等院で戦いに敗れ、七十の老い腹掻き切って死ぬわけです。そういうことも、老境に入った西行の耳にも入り心にも響いてくる。さらに、木曾義仲という若者が、勢いよく平家を都から追い出しますが、やがては同族の源氏によって滅ぼされていく。そして平家は一ノ谷で戦さに敗れ、一族西海の藻くずとなっていく。幼い安徳天皇まで三種の神器のひとつを抱いたまま海に沈んでしまわれる。その少し前には清盛も死んでいる。そして平家一族の瓦解……。西行より少し年若い藤原定家が日記に「紅旗西戎はわがことにあらず」と書いています。「平氏の赤旗源氏の白旗が血で血を洗う争いをしている、そういう生身の人間の争いはおれの関与しないことだ。心のらち外のことだ」とそう書かなければならないほど生臭い時代だったのです。また、西行が出家まもなくの若いころには、出家恋愛説の対象として知られる皇后の失脚事件があります。若い新たな后の方へ鳥羽天皇の心が移って、先の皇后が生まれた一の皇子・崇徳天皇が位に着かれるのだけれどすぐに引き下ろされて、若いお后が生まれた皇子が天皇の地位を襲います。その鳥羽天皇の第一の后に西行は心を寄せていたといわれていますが、心を寄せていたといっても、男女の間の愛情ではなく非常に深い信頼の心であったと私は思います。その風雅、和歌を愛せられる女性は西行よりも遙かに年上ですから、そこには恋愛感情はなかったのではないのでしょうか。しかし、失脚したその方への深い悲しみは、若い西行には耐え難い思いだったのでしょう。そして外へ出れば、源平の争乱が深刻になっていく。そういう時代です。

内に棲む漂泊の心

出家してしばらく、西行は高野山にこもって修行をしていた時代があります。その後高野山を出て、讃岐にある崇徳院の御陵のそばに行ってそこでしばらく庵を結びます。おそらくそれは、父鳥羽上皇から位を引き下ろされて流刑となり無念の思いやる方たなく怨霊となっている崇徳院の魂を鎮めるための行動だったろうと思います。

やがてその庵からもよそへ移るわけですが、そのとき歌を詠んでいます。

庵の前に松の立てりけるを見て

ここをまたわがすみ憂くてうかれなば松はひとりとならむとすらむ
(山家集)

庵の前の松の木に詠んだ歌だと詞書きには書かれていますが、松の木にさえこういう思いを訴えているのです。「ここでもまた自分の心が絡みに絡んで住みづらくなって、さすらっていったならば、ここに住んでいた間自分の心を深く慰めときにはげまし、時に同じ思いを嘆いてくれた、自分の心の友であったこの松はまたひとりきりの孤独な松にもどっていくのだなあ」と松の木にこの歌を残していった、そういう西行です。

この歌には西行の心がよくあらわれています。少しその庵になじんで、その庵のそばの草や木や鳥の鳴き声や、その近辺の人達の心になじみを深めると、それを思い切って、そしてまた旅に出るのです。こここのところはわれわれの常識では考えにくいようですが、深く考えればわれわれの心にもそういうものを求める思いがありますでしょう。西行が憧れているのは仏の道に専念し、仏の道に心を集中しその弟子になっていこうとする宗教的な情念です。しかし、同時に非常な多感さを、生まれつきの性格の中に持っているのです。

なぜ住みづらくなってしまうのか。それは、その庵そのもの、その周囲にある草や木や、その周りで啼いている蝉などの虫の声、吹く風やそういうもの一切、それから心を寄せてくれる村人達。そういうものに心が絡んでいってしょうがなく、それが極限に達したとき、このままではいられないという思いになるのです。そしてそこを振り捨てて旅に出るのです。また新しい自分の心のよすがを求めていくのですね。そこで2～3年庵を結んで、また、同じような心になって、出ていくのです。そのとき、このような挨拶を残していくのです。

平安から鎌倉へ。動乱の時代の中、
老境を迎えた西行は伊勢に住みました。
この地で西行は、何を見、何を感じたのでしょうか。

西行は伊勢に来て久しくここに留まりました。そして神宮の周辺で庵をときおり変わりながら住んでいたのです。この地で自分の歌を自選して編んだ二つの歌合を神宮に奉納しています。これは西行の晩年の時期ですが、若い頃から西行は伊勢に心を寄せ、出家してまもなくにも伊勢の歌を詠んでいます。老境を迎えた西行のこの地での思いはどのようなものだったのでしょうか。西行の生涯の歌の業績から考えると、伊勢での歌は西行の代表作とはいえないのですが、いくつかの歌を見ながらその心をたどってみましょう。

西行の中の神と仏

伊勢にまかりたりけるに、大神宮にまゐりて詠みける

榊葉に心をかけん木綿垂でて思へば神も佛なりけり
(山家集 1 2 2 3)

「懸ける」という言葉は神や仏に思いを集中することです。「懸けまくも賢き」という祝詞の常用文句がありますが、心に懸けてお祈り申し上げるのも、或いは口に出して申し上げるのもおそれおおいことですがという意味です。「榊の葉に我が心を懸けよう。榊の枝に清らかなゆうを垂らして、思いをひたすらに集中して思うと、神も仏であることだ」と詠んでいます。

高野山は真言密教の山ですから、そこにいた間、西行は真言密教的な思いを深めているわけですが、このころの日本人の宗教的な心を占めていたのは本地垂迹説による神仏習合です。本地の仏さまがこの地に姿を変えて現れられたのが日本の神様なのだという考えで、神も仏も一緒に祀っていたのです。神仏習合というのは現在の我々から見ると不思議な感じがするものですが、明治維新後に廃仏毀釈という暴挙がつむじ風のように席卷するまでは、1000年ほどの長い間、日本人は神仏習合の信仰に心のよりどころを求めていたのです。そのことをそれぞれ個々の価値観で批判するのは結構ですけど、われわれの祖先が長い間このことに深い心の平安を求めていたというのは事実です。それに対して、日本の神道の立場から「こちらが本地である」といった反本地垂迹説が出たりもしますが、これはイデオロギッシュなアンチテーゼでありまして、宗教的な深い感動の力にはなり得ません。ことに密教的な本地垂迹説というのは宗教的に、また、哲学的に深められて、その影響は後々まで続きます。ですから今でも古い神社には建築などにも昔神仏習合の形だった名残が部分的に残っているところがあります。明治期、猛烈な形で仏像や教典を神社から外へ放り出し、官庁から通達が来て一夜のうちに髪を剃ることをやめさせ、読経をやめさせるなど無理な形の廃仏毀釈がおこなわれたのです。しかし、日本人は長い年月神仏習合の形で神仏を一つの心で拝んできたのですから、今でも、そのような感覚が残っているのです。それを外国人など一神教の立場の人が見て「日本人の宗教は分からない」「日本人は結局無宗教だ」などというのです。

仏教ははじめて日本に入ってきた外来の宗教です。外来の宗教が入ってくるのは避けられないことでもあり、仏教は包容力のある寛容な宗教ですから、最初に日本に入ってきて日本化した宗教が仏教であったのは、良かったことだと思います。

神宮での西行

西行は町の中で生きた宗教者です。高野山で修行して、心は次には伊勢へと動いていたにちがいありません。高野山を下りて伊勢にやってくる。伊勢神宮に使えている神主さんたちも当時は多く神仏習合の考えを持っておられたでしょう。その神職たちと、歌を通じて西行は宗教的な交流を深めていったに違いないでしょう。西行は僧形をしているのですから神宮には入れてもらえなかったらうという説があります。しかし、歌をみていますとそうではないようです。特に内宮に仕えていた神主さんたちと、文学的にも、宗教的にも、学問的にも非常に深い交渉を持ち、その名残を作品に取り入れています。おそらく西行は許されて神宮のご神域に入り、参拝をしていただろうと思います。そう考えると分かる歌がたくさんあります。

高野の山を住みうかれてのち、伊勢の國二見浦の山寺に侍けるに、
大神宮の御山をば神路山と申、大日如來の御垂跡を思てよみ侍ける

深く入りて神路のをくを尋ぬれば、またうゑもなき峰の松風
(千載和歌集 1 2 7 8)

高野山にいても心は外に誘い出されて、一処に定住するということができない。西行のような感じる心が強い人は心が絡まれてしまうのを解き放つことが必要なのです。住んでいたところを振り捨ててさすらったのち、二見浦の山寺にいるときに、大神宮の神霊の鎮まっていたらっしゃるお山を神路山という。その奥に入って松風を聞いたのです。これは大日如来様が垂迹していたらっしゃる天照大御神としてお姿をお示しになったのだと思い、そのありがたさに感動して詠んだ歌です。情景と心が深く響き合っています。

題知らず

ほととぎす深き峰より出でにけり外山の裾に聲の落ち來る
(新古今和歌集 2 1 8)

これは、前の歌よりは素直な気持ちが心に響いてきます。ホトトギスが姿は見えないけれども空を鳴き渡ってきて、自分の庵の処にあのするどい声が落ちてくる。リアルな感覚を伴った、そして同時にそういう自然の中に、まさに現象的なものだけではない深い心をともなっています。前の歌で全面に押し出されていた垂迹説の感覚がこの歌では表から消えて、すらすらとホトトギスを詠んでいるように感じ取ることができるのです。

題知らず

神路山月さやかなる誓ひありて天の下をば照らすなりけり
(新古今和歌集 1 8 7 8)

柄の大きい、いい歌です。神路山から月がのぼっている。そしてそこからこうこうと光がさしている。月の好きな西行らしい歌です。『古事記』のはじめの部分、海での三柱の貴子誕生のところで、父の伊耶那伎の神は月読の神に「おまえは夜の食国（夜の世界）を照らせ」といいます。

その誓いが続いていて、今もこうして月夜身の神は天の下を照らしていらっしゃるのだと月のさやかな光をたたえているのです。「神路山」とある歌では、西行はお釈迦様と縁の深い霊周山を心に持っています。日本では神路山に、大日如来様の垂迹のお姿として天照大神さまがいらっしゃるといことが前提にあるのです。

あまてらす月の光は神垣や引くしめ縄のうちとともなし

この歌は西行法師太神宮にまうでて、遙にあらがきの外にて、心のうちに法施奉りて、本地はへだてあるべきにあらぬに垂迹のまへにちかく参らざる事を思ひつづけ侍りて、すこしまどろみけるに、つげさせ給ひけるとなむ

(玉葉和歌集 2 7 2 7)

空からこうこうと世界と照らす月の光。神様の御垣周りにはしめ縄がはりめぐらされていて入ってはいけないという禁制があるけれど、神様の心は月の光のようにその内も外の区別をたてずに広く遍照金剛に輝くものなのだ、という意味です。この歌は面白い註が付いています。これは誰が付けたのでしょうか。西行自身が付けたのか、勅撰和歌集の玉葉集の編集の際につけられたものか。俊成と西行は和歌の上で深いつながりがありますので、あるいは後に俊成が付けたのかもかもしれません。神宮に参詣したが、僧形の西行は外側の垣から中へ入れてもらえないので、心の内に祈りの言葉を念じ、本地の仏さまはそんな区別などおたてにならないのに、垂迹されたこの地では区別をなさるのはどういうわけなんだろう思いながらまどろんでしまった。すると夢の中に天照大神が姿をお現しになって、嘆く西行の心を哀れんで詠まれたお告げの歌だということです。しかし、それを感じたのは西行の心であり、言葉に残したのも西行でした。

昔の和歌にはこのように神仏が神主や巫女などに乗り移ってくださった歌がありました。和歌集にも神祇歌、釈教歌などの部立てがあり、それは神様や仏さまに関する歌もあるのですが神様、仏さま自身が言葉を唱えられ詠まれた歌もふくまれています。日本の和歌の中にはそういう心が伝統的にあるのです。

心なごむ西行

伊勢に、もりやまと申す所に侍りけるに、庵に梅のかうばしく匂ひけるを

柴の庵にとくとく梅の匂ひ来てやさしきかたもあるすみかかな

(山家集0040)

この歌には、西行ののどかな心があらわれています。
このような粗末な芝の庵にいち早く梅のにおいが漂ってきている。こんなわびしい飯の庵だけれど、なかなか優しいすみかであることよ。伊勢の風土が西行の心をなごませたのでしょう。

伊勢の二見の浦に、さるやうなる女の子どもが集まりて、わざとのこととおぼしく、
蛤をとり集めけるを、いふ甲斐なき海士人こそあらめ、うたてきことなりと申しければ、
貝合に京より人の申させ給ひたれば選りつつ採るなりと申しけるに

今ぞ知る二見の浦の蛤を貝合とておほふなりけり

(山家集138)

伊勢の二見の浦に行ったところ、きちんとした身なりの女の童たちが集ってはまぐりを拾っている。貧しい海の生活者ならばいざしらず、それはふさわしくない嘆かわしいことだといったところ、都から貝合わせにしたいからとお申し付けがあったので美しい貝殻を選びながら拾っているのだという。それで「初めて知った。はまぐりの貝を貝合わせとして拾うのだなあ」と詠みました。ここにも人や自然との優しい交流が感じられます。

西行の滑稽な伝説

西行はこのようにして宗教家としての姿と心を持ってあちこちを遍歴し、そこでさまざまな思いに触れた感動を和歌に詠んでいます。それが日本人が昔から考えてきた宗教的な力を持った人の典型的な姿です。古代から神様は村をおとづれ、予祝や生活の指針を和歌の形であらわしました。そのとき、神に仕えるべき清らかに美しい女性が、願いと感謝をもうしあげる、それも和歌の形でした。記録に残る時代になる何世紀も前から、聖なる旅人が村を訪れるというそういう心の伝統がありました。やがて仏教が日本に入り、それをいち早く取り入れられた聖徳太子、中国からすばらしい思想を伝えられた弘法大師など「御大師様」が村を訪れ、村の生活に活力を与え、助けるという伝説ができてきます。そういう心の伝統があり、西行もそういった中世の神話の世界に引き込まれて行きました。

西行にまつわる謹厳な、或いは幽玄な伝説の他に、日本のあちらこちらに「西行返し」というような滑稽な伝説が見られます。三重県にも雲出川のほとりにそういう伝説があり、柳田国男先生が書かれた「神を助けた話」という本に載っています。これは民間に伝わり広まった話を柳田先生が採集された話で、越後に伝わる童問答とほとんど同じ形で残されています。

西行法師垂水が成就寺に参詣する道で、雲出川のほとりで童が傍らの木に駆け上るのを見て「さるちごと見るより速く木に上る」と言ったのです。短歌の上の句の形になっています。「さるちご」は「かわいい少年」という意味と「猿のような子ども」とがかけられています。ここには「僧と稚児」という民話的な題材も取り入れられています。するとその童がすぐさま間髪を入れず「犬のようなる法師きたれば」と返しました。その答が連歌の形式になっていて、西行が一本とられたという話です。

西行やお大師様などが来て、立派な良い歌をい残してくださった。困っていた人々をたすけてくださったという話の裏側で、文献には出てきませんが、このように滑稽な話が民間には伝承されています。こういうものに裏打ちされて文学や歴史、宗教などの伝承は生き生きとします。これらは表向きの歴史や文学史では見落とされていますが、われわれの祖先たちの村の土の中から生み出されていった、このような信仰や文学を忘れずに持っていないと、すべての文化は枯渇し形骸化してしまうのです。

遊びと学び

近代の学問は遊びを排除しますが、学問、文学には「遊び」と「学び」の両方が必要です。「遊び」の第一義は魂をのびのびとし感動を深くすることでした。音楽や舞などの遊びの中に心を遊ばせ、人々は心を深くすることができるのです。一方「学び」のはじめはまねび・模倣でした。中国などから入ってきた異国の文化をまねることが学びの第一義であったのです。遊びによって得られる大和心、まねびによって得られる唐才の両方が文学を創ります。平安の頃、新しい外来の文化をまねることは男性が中心に行い、女流が大和心を深めました。、奈良時代に漢詩が入ってきてそれに圧倒された平安時代の初め、漢詩の分類や技巧を短歌に用いようとして和歌の暗黒時代と云われる時代があったのですが、それを乗り越えて古今和歌集、源氏物語（これは物語ですが、要所要所に歌が詠み込まれていて際だっています）枕草子（これがこれはエッセイなどといわれていますが単純な随筆ではなく、どういうときにどういう和歌を詠むかがかかっているのです）などが作られました。現代やっと女性による文学が活気づいてきました。これから後、2～3世紀するとヨーロッパ文学をまねびとった上で、本当の日本人の倭心・遊びの心を持った文学が出てくる事でしょう。そしてそれは女性によってもたらされるでしょうと、私は予言します。しかしそのころ我々はもういないのです。